



植物を栽培することから、人は自然の一部としての自らの循環を学んだ。神話の創造は、その学習の結果だった。

やがて、植物のメカニズムを探ることから、科学が芽生えてきた。

科学力によって、食物の確保は安定して、人の数は増えつづけた。未曾有の人口増加は進み、人は今、種として地球上で絶頂期をむかえている。同時に、地球規模の食糧危機に直面し、さらなる植物生

産性の向上を追求せねばならなくなってしまった。対処療法的な生産技術の開発だけが、本当の解決法になるのだろうか。

新しい解を求めて、人は再び植物のメカニズム、抵抗する力そして進化する力に注目はじめた。植物本来の力を知るために、人も本来の神話する力、科学する力を取り戻す必要があるようだ。

歴史篇 I

人間と植物の関係は不思議だ。植物は絶えず黙して何も語ってくれないが、人間は植物と接する過程で色々なことを勝手に語り始めるようになつた。特に、穀物を栽培する術を知るようになつてからは、人間は変わつた。

植物のライフ・サイクルに鼓舞され、人間の生活にリズムが生まれたのだ。

暦の誕生も、もともとは、農耕のリズムを体系化したことがはじまりだ。

人間の原初的な世界観も同じだ。狩猟を生活の糧にしていたときは、生の起点、死の終点が直線的だつた。動物（人間）と動物の関係は、肉感的で、生と死の対立構造の中にお互いが依存していたからだろう。動物を扱う術はまだ成立していなかつた。植物を育てるようになつてから、生と死に対する感じ方も劇的に変化した。秋の収穫期を生の絶頂ととらえ、植物が枯れてしまふことに死を見る。春の発芽は、生の起点ではなく、再生のシンボルとみた。世界各地の古代神話にでてくる神々の物語もこのコンテキストで読むと興味深い。

古代エジプトの神話から紹介しよ

う。最も重要な男神オシリスは、地神ゲブと空神ヌトの子で、妹イシスと結婚した。人間の良き王として神々に変わりエジプトを治め、エジプト人に大麦の作り方（＝農業）を教えた。しかし、これを嫉んだ弟セトに殺されてしまふ。セトはオシリスの死体をバラバラにしてエジプト中に撒き散らした。妹イシスはこの死体をひとつ残らず拾い集めて麻布に包み込み、オシリスに息を吹き込んで復活させた。復活したオシリスはその後、豊饒・彼岸・復活の王となる。このストーリーが古代エジプトの世界観の原型になつていて。

ピラミッドの壁に刻まれているテキストは、死者をオシリスのように永遠の彼岸の世界に無事に導くガイダンスである。後世になると、彼岸の信仰が庶民にまで広がつていった。生前よく大地を耕したもの（＝よい行いをしたもの）だけが、死後オシリスの裁判による表像とみなされてきた。カオス（混沌）の神であつた。調教の術を知らないなかつた農民が、動物に対して抱いていた憧れそのものであつた。そのセトが、豊饒の神オシリスを殺す。オシリスは生きかえりはするものの、地上には決して住めなくなる。永遠に地下の世界（＝冥界）で生活している。

セトの仇を討つたのが、オシリスの子、ホルスだ。叔父セトとエジプト統一王の名をかけて争い勝つ。それからというもののホルスは、エジプトの守護神、また父オシリスと対照的に地上の生の神となつた。ホルスは、「いと高き（ところにいる）者」を意味し、鷹の姿をしている。空の神でもある。獣

り方を知つたオシリスは、植物の循環サイクルを読み取つた。豊饒＝作物の収穫、彼岸＝作物の腐敗、復活＝植物の発芽。オシリスの人生は、農業を知つたが故に、神聖視され、植物の生の流れと同一視されてしまつた。オシリスは、農業を知つたことを象徴するように、大麦の穂を持った姿で描かれている。

ちなみに、オシリスを殺害した弟セトは、得体の知れない動物の姿をしており、永遠の生命を得たが、動物に対して抱いていた憧憬そのものであつた。そのセトが、豊饒の神オシリスを殺す。オシリスは生きかえりはするものの、地上には決して住めなくなる。永遠に地下の世界（＝冥界）で生活している。

セトの仇を討つたのが、オシリスの子、ホルスだ。叔父セトとエジプト統一王の名をかけて争い勝つ。それからというもののホルスは、エジプトの守護神、また父オシリスと対照的に地上の生の神となつた。ホルスは、「いと高き（ところにいる）者」を意味し、鷹の姿をしている。空の神でもある。獣

に脅かされていた農民には、地を這う現実を超えたあこがれの存在であつたのだ。

死と再生の話に戻ろう。大麦の作

技術篇 I

ワクチンが発明されて200年以上になる。感染を予防するこの接種方法が確立されてから、人が病原菌やウイルスに対抗する医学的な技術が飛躍的に向上した。

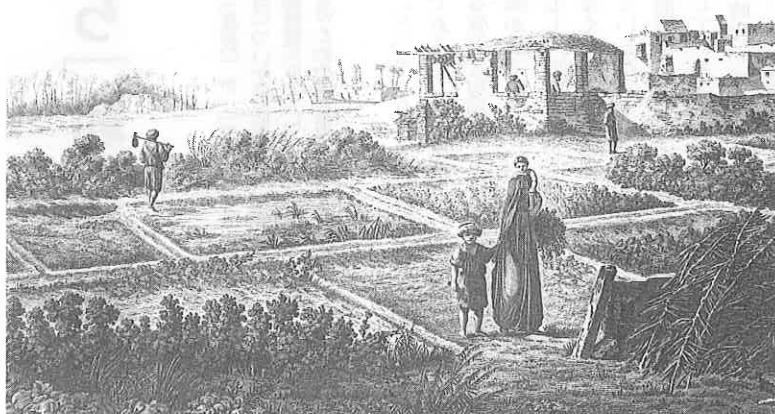
最近は、植物にも本来、病害に対する抵抗力が備わっているという話を聞くようになつた。さらには、その抵抗性を意図的に高める手法も少しづつわかれ始めているという。

動物は進化と共に免疫機構を確立し、免疫力によって体内に侵入してきた異物から体を守つてゐる。ワクチン接種は、その免疫機構をうまく活用し、ワクチン、つまり毒性を低くした病原菌やウイルスの残骸をあらかじめ接種し、それに対する免疫力をつけさせておく。そこに本当の病原菌やウイルスが侵入すると、免疫機構は即座にフル活動して、病原菌やウイルスを駆逐するという仕組みになつてゐる。

一方、植物には動物と同じ形の免疫機構は存在しないが、だからといって植物には何らかの病害に対するための機構が存在しないとは言えない。逆に、植物に本来抵抗力があると想定すれば、その抵抗力を破つた病原菌だけが

実際の症状を伴つて現れているとも考えられる。

理由がわからないにせよ、後者の見方をするほうが自然なような気がする。伝統的な農法がそのことを示している。各地の麦畠で昔から行われている麦踏も、稻の稚苗をさすつて“鍛え”のもの、いかにも植物が持つてゐる“の”も、いかにも植物が持つてゐる何からの抵抗力を高めているといった感じがする。経験的に効果があつたからこそ受け継がれた手法であることに違ひはないであろう。



この手法のおもしろい点は、病害が発生してから対処するのではないといふところだ。発芽の段階で、作用点がはつきりしないまま、踏んだり、摩つたりしている。

現在の農薬にあたる植物の病害を防ぐための剤も、基はといえば実地の試行錯誤から使いはじめられた天然物である。しかし、二つの手法は根本的に異なる。前者が植物の抵抗力を触発することによる間接的防除であるのに対し、後者は病原体を標的とした直接的防除である。二つの防除方法は、その後、全く別の道を歩むことになる。

実際の病害防除の発展の歴史とは、後者の開発の繰り返しだった。人間が意図的に植物を栽培を知つたと同時に、現在まで続いている人間と作物の病害との対立の構図は定まつてしまつた。安定した食料確保のため、人間にとつて病害は敵であり、病原体は直接的な抹殺の対象である。病原体は、人間のいかなる攻撃にも抵抗性を示し、最終的には耐性菌を発現させる。人間と作物の耐性菌との終わりなりなき闘いがはじまつたのだ。非常に古い時代から、豊作を願う祭りが行われたように、病害を呪う祈りも存在した。その呪術は、省みれば、直接的に病原体を断とうとする殺菌剤、殺虫剤の発想の起りとも言える。